

我が国におけるアクティブ・ラーニングの受容について

On the acceptance of active learning in Japan

芝崎良典・芝崎美和

Yoshinori SHIBASAKI, Miwa SHIBASAKI

Abstract

Active learning has received considerable attention over the past several years and has attracted strong advocates among faculty looking for alternatives to traditional teaching methods. Active learning is generally defined as any instructional method that engages students in the learning process. In short, active learning requires students to do meaningful learning activities and think about what they are doing. The core elements of active learning are student activity and engagement in the learning process. With the active learning process, students transition from being mere recipients of information to being participants actively engaged with new information in a learning environment. However, there has not been much discussion as to whether active learning changes the teacher.

Keywords: active learning, engagement, teaching method

本研究では、アクティブ・ラーニング型授業の実現は次のような段階を経ながら進むとした。1. 一方向的な知識伝達型講義、2. 形式上アクティブ化された授業、3. 実質上アクティブ化された授業である。現在、多くの大学で授業のアクティブ化が進められているが、3の段階までの授業のアクティブ化にまではなかなか進んでいないのが現状であろう。授業をアクティブ化しようとする場合、教員に大きな変化を求めることになるから、そう簡単には進まないのは当然とも言えるが、改革が進まない理由のひとつにアクティブ・ラーニングに対する理解の混乱がひとつあろう。本研究では、最初に「アクティブ・ラーニング型授業」を定義したのち、アクティブ・ラーニング型授業の展開について述べる。アクティブ・ラーニング型授業の展開については、河井（2015）が学生の視点からとらえたアクティブ・ラーニング型授業の展開を参考にしている。本論文の特徴は、実質上アクティブ化された授業の実現が難しいのか、その理由をアクティブ・ラーニングの定義の理解から考えた点にある。

1.1 アクティブ・ラーニングの定義

Bonwell and Eison (1991) は、アクティブ・ラーニングを、学生が聴く以上の活動を行い、その活動について学生が考えるよう巻き込んで行くものと定義している。

To provide a working definition for the following analysis, the authors propose that,

given these characteristics and in the context of the college classroom, active learning be defined as anything that “involves students in doing things and thinking about the things they are doing.” (Bonwell & Eison, 1991, p.2)

また、Braxton, Milem, and Sullivan (2014) は Bonwell and Eison (1991) の定義を補い、より簡潔にアクティブ・ラーニングを以下のように定義している。

Active learning is any class activity that “involves students in doing things and thinking about the things they are doing” (Bonwell, & Eison, 1991, p. 2). (Braxton, Milem, & Sullivan, 2014, p.571)

ふたつの定義に共通しているのは、授業において学生が聞いている以上の「活動を行う」という点とその活動について「考える」という2点である。伝統的な授業は、一方向的な講義形式の授業であり、学生には講師の言うことを聞いている以上のことは求められなかった。2012年、中央教育審議会は答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」を報告した。題目のとおり、この答申は、生涯にわたり学び続ける力、主体的に考える力を学士教育課程のうちに学生が身につけるよう大学に求めるものである。授業については、教員による一方向的な講義形式の教育から学修者の能動的な学修への参加を取り入れたアクティブ・ラーニングへの転換が求められている。一方向的な講義形式の授業の主体は講師であった。授業のアクティブ化は、授業の主体を講師から学生に転換させることを求めている。大きな改革である。学生の授業への参加度を高めるためにも、その授業で何を学び何を準備すべきであるかといったことがわかるよう、シラバスに書くべき事柄はよく選ばなければならない。学生の自主的な学修時間を確保するためにも、履修のしすぎをふせぐ必要もある。評価のあり方も明確なものに変えていく必要もあるろうし、学びが間延びしないようにクォーター制の導入なども検討しなくてはならない。学生を変えるためには授業だけが変わるのではなく、大学自体が変わらなければならない。そんな大きな改革を今大学は経験しているわけである。

1.2 アクティブ・ラーニング型授業

ところで、本研究では授業をアクティブ化し、うえで見たような、学生が聞いている以上の活動を行い、その活動について考えるよう促そうとしている授業のことを「アクティブ・ラーニング型授業」と呼ぶことにする。「アクティブ・ラーニング」という用語を、能動的に学修することとらえてしまうと、講義形式でも学生は能動的に講師の言うことを体系化しようとしているのではないかといったアクティブ・ラーニングに対する反論が生まれる余地を許してしまう。議論の混乱を防ぐためにも、本研究では、一方向的な教育方法ではなく、学修者の能動的な学修への参加を促すような教授・学習法を指す言葉として、アクティブ・ラーニング型授業という用語を使い、アクティブ・ラーニングという用語は引用等に限りできるだけ使わないことにする。

アクティブ・ラーニングという用語を適切に理解することが、アクティブ・ラーニング型授業の展開をうながす大きな要因であると考えている。実現しようとしているものをどう理解しているかが、その実現の範囲を決めることになるであろう。例えば、中村・阿内・朝賀・松下(2014)の調査報告にアクティブ・ラーニングという用語の使用法の混乱をみることができる。中村ら(2014)は、アクティブ・ラーニングに関する調査のためアメリカ合衆国のウィスコンシン大学オークレア校(UWEC: University of Wisconsin-Eau Claire)を訪問した。その調査結果を報告した論文のなかで、訪問先の教員が行ったアクティブ・ラーニングの定義を紹介している。それは「生徒・学生同士がパートナーである学び」(p.89)という定義であった。この定義は学習形態から行われたものであり、アクティブ・ラーニングを手法・授業の総体として定義しようとしていると考えることができ

る。例えば、同論文には、「AL は手段であり、UWEC における AL を導入する目的は、学生が主体的に授業に参加できるようになること、すなわち「学生参加」(Student Engagement) である。学生が授業に主体的に関わることができるかどうか、それ自体が問題であり AL はそのための手段であることが再三強調されていた」(p.88) とあり、アクティブ・ラーニングを教員側からの仕掛けとして定義しようとしていることがわかる。ところが、別の箇所では、先にアクティブ・ラーニングを「生徒・学生同士がパートナーである学び」と定義した訪問先の教員の次のような発言がおさめられている。「AL は必ずしもグループワークや、討論の形式をとる必要はない。学習者一人一人の思考が変われば (mental change)、一人での学習すら AL というものという」(p.89)。ここでは、アクティブ・ラーニングという用語は学生の能動的な学修という意味で用いられている。このような定義の仕方をさして、中村ら (2014) 自身も「茫洋として」(p.89) いると指摘している。このケースは、教育の現場においては、アクティブ・ラーニングという用語がふたとおりの意味に用いられていることを明確に示している。このような用語の混乱は論文中に現れることは少ないが、教育の場ではよく出会うものである。このような混乱が起らないよう、本研究では、学生が聞いている以上の活動を行い、その活動について考えるよう促そうとしている授業のことを「アクティブ・ラーニング型授業」と呼び、アクティブ・ラーニングという用語はできるだけ使わないことにする。

2. アクティブ・ラーニング型授業の展開

授業のアクティブ化の必要性はよくわかる。人口減少社会である日本が今後も一定の国力を維持していくためにはこれまでの知識や技能の習得に加えて、それらの技能を社会の様々な問題に対して応用していきける力が求められている。学生がそのような力をもてるような授業を大学が提供しているかと言えば、そうでない。例えば、浅野は 1994 年に「大学の授業を変える 16 章」という書籍を出版しているが、その「はじめに」に次のような記述がみられる。

この本を出すのは、大学授業の多くが、授業内容は別にして、授業の仕方については、はっきり言って、きわめて低水準にあるからです。その典型が講義ノートにもとづいてただ語るのみという授業です。授業としての工夫はほとんどありません (p. iii)。

このような状況を出発点とし、授業の主体が学生にあるような授業を導入しようとするとき、おおきな労力と時間がかかることは容易に予想できる。すぐに授業がアクティブ化するとは考えにくい。河井 (2015) はアクティブ・ラーニング型授業の展開を図示している。授業を受けている学生の行動・態度から、3つの展開過程を示している。最初は、1. 学生が受動的な段階である。この段階では教員から学生への一方的な知識伝達型講義が行われている。授業内容を聞いている以上の活動を学生がしていない段階である。次は、2. 外的活動が能動化している段階である。これは、ディスカッションやプレゼンテーション、ピアインストラクション、チーム基盤型学習法 (TBL: Team-Based Learning) やプロジェクト基盤型学習法 (PBL: Problem/Project-Based Learning) といった聞く以上の活動を学生が授業中に行っている段階である。「外的活動において」とあるのは、確かに講師の言葉を聞いている以上の活動を学生は行っているが、そこに高次の認知活動が伴っているかどうか分からない段階である。最後は、3. 内的活動が能動化している段階である。外的活動に高次の認知活動が伴っている場合である。アクティブ・ラーニングの定義から考えると、アクティブ・ラーニングが実現しているのは第三の段階である。河井 (2015) のいう「外的活動を能動的に行う」とは、Bonwell and Eison (1991) や Braxton, Milem, and Sullivan (2014) のいう「活動を行う」ということであり、河井 (2015) のいう「内的活動を能動的に行う」とは、Bonwell and Eison (1991) や Braxton, Milem, and Sullivan (2014) のいう、その活動について「考える」ということである。

河井 (2015) は、授業を受ける学生の立場から、アクティブ・ラーニング型授業の展開についてま

とめているが、授業を計画する教員の立場から、アクティブ・ラーニング型授業の展開を考えると次のようにまとめることができよう。1. 一方向的な知識伝達型講義、2. 形式上アクティブ化された授業、3. 実質上アクティブ化された授業である。

2.1. 一方向的な知識伝達型授業

第一の段階は、浅野（1994）が問題としたような授業をいう。大学においても、アクティブ・ラーニングを展開する必要性のあることが徐々に認識されはじめた 2013 年ごろ、よく聞かれた質問に次のようなものがあった。「教員の一方的な講義形式の授業であっても、学生が能動的に聞いているならば、それはアクティブ・ラーニングと呼ぶべきではないのか」、「アクティブ・ラーニングは効果があるのか」といった質問である。同様の議論は海外でもあるという（河合塾, 2011）。質問を受けていた当時は、純粹に定義に関する疑問からくる質問かをとらえていた。けれども、単に今まで行ってきた一方的な講義形式の授業のしかたを変えることへの抵抗感からくる質問であったのではなかったか。アクティブ・ラーニングを導入していかなくてはいけない。しかし、今の授業のしかたを変えるには時間と労力が必要であるし、なにより自分の授業のしかたを否定されているようである。学生が真剣に聞き、能動的に聞いたことをまとめるなどしていれば、アクティブ・ラーニング型授業と認められるならば、今の授業のしかたを変える必要がなくなる。

真剣に聞いていればアクティブ・ラーニング型授業であるという考え方は明らかにまちがっている。仮に正しいとするならば、浅野（1994）が指摘するような「講義ノートにもとづいてただ語るのみという授業」もアクティブ・ラーニング型授業として認められることもできてしまうからである。「教員の一方的な講義形式の授業であっても、学生が能動的に聞いているならば、それはアクティブ・ラーニングと呼ぶべきではないのか」という質問があれば、「授業の主体はだれであるべきか」と問い直すことが大切かもしれない。授業の主体は講師ではなく、学生であるはずである。学生が能動的に聞いていることを強調するのではなく、学生が聞いている以上の活動を授業内でしていないことが強調されるべきであろう。

2.2. 形式上アクティブ化された授業

第二の段階は、ディスカッションなどの活動を行うように教員が工夫しているが、その活動に高次の認知活動が伴っているか確認する手段なく授業をしている段階である。どの大学でも積極的にアクティブ・ラーニング型授業の導入に取り組んでいるが、方法上の困難さから、その活動に高次の認知活動が伴っているのか確認できないでいる。

方法上の困難さのほかにも、アクティブ・ラーニングという概念のとらえられかたにも問題があるように感じる。アクティブ・ラーニングという概念は、学習者中心の教育への転換をうながすためのキー概念であって、教授手法の単なる一形態ではない。中央教育審議会（2012）の作成した用語集では、アクティブ・ラーニングは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と定義されている。この定義の大切な部分は「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた」という部分である。教員中心だった「教員による一方的な講義形式の教育」を、学生中心の教育へ転換し、単に座って聞いているだけでよしとするのではなく、授業をうけることで特定の技能が身についたかどうかを評価していこうとしているわけである。本来はこの箇所にアクセントが置かれて語られるべきである。しかし、なぜだかこの部分は傍に置かれて、「アクティブ・ラーニング＝教授・学習法の総称」、アクティブ・ラーニングとはある教授・学習法であり、目新しい学習法がひとつまた宣伝されているというようなとらえかたをしている教育関係者は意外に多い印象がある。実際、2016年の現在にあっても、「アクティブ・ラーニングは PBL などの教授・学習法のうちのひとつの手法にすぎないのに、どうしてアクティブ・ラーニング、アクティブ・ラーニングと声高にいうのか」という声を聞く。

このような「アクティブ・ラーニング＝教授・学習法の総称」といった不適切な用語の理解が、授業の改革を形式上のアクティブ化まで留めているひとつの原因である可能性もある。

2.3. 実質上アクティブ化された授業

第三の段階が、活動を軸に授業が進められるとともに、その活動に伴う高次の認知活動を外化し評価する手段を準備したうえで授業をしている段階である。この第三の段階が、河井（2015）のいう学生の「内的活動が能動化」している段階であり、授業のアクティブ化で求められるゴールである。

この段階にある取り組みの具体例としては、田口・松下（2015）の取り組みがある。概念地図を使い、学習者が獲得した諸概念を外化させる。その外化した概念地図を評価するためのルーブリックも開発している。概念地図とは、概念間の関係を表現したものであり、円と線と単語から作られる。典型的には、用紙の中央に円を描き、その円のなかに焦点質問を記入する。例えば、「授業」と書き、それを円で囲う。授業に関連のある概念を書き出す。例えば、「一方向的な講義」と書き、それを円で囲い、ふたつの円の間に線を引く。この線でふたつの概念の間に関連のあることを示す。「一方向的な講義」は「授業」のひとつのタイプであるから、線の横には「タイプ」とでも記入しておく。一方向的な講義の主役は誰か。「教員」と書いて、「一方向的な講義」との間に線を引く。このようにしながら、あるテーマについて概念の関係図をあらわしたものを概念地図という。この概念地図は授業の計画から評価まで様々な場面で利用可能である。例えば、評価という観点でいえば、授業期間に同じテーマで概念地図を描く活動を行えば、授業を受けることによってどう概念地図が変容していったかを評価することもできる。また、概念地図を描くという活動は、学習者のあたまのなかで知識どうしがどのようにむすびつきあっているかを示すものであるから、ある場合には学生のうちの誤概念をみつけることにも役立つ。

このように外化の方法とともに、それを評価するルーブリックの開発を行って、はじめて学生の能動的な内的活動を評価する授業、実質上アクティブ化された授業が実現する。

3. アクティブ化に必要な観点

授業のアクティブ化のために変わる必要のあるものが3つある。まず、授業についての教員の考え方が変わらなければならない。授業の主体を教員ではなく学生におく必要がある。これによって1段階「一方向的な知識伝達型授業」から2段階「形式上アクティブ化された授業」へ進む準備ができる。もうひとつは授業のしかたを変えなければならない。学生に聞く以上の活動を用意しなければならない。これによって2段階に進むことができる。そして、評価の方法を学ばなければならない。例えば、学生の内的活動を外化させたものをどう評価するのか。それについて答えをもっておかなければならない。新しい方法を私たちは学び続けていく必要がある。これによって、3段階「実質上アクティブ化された授業」に到着することができる。

新しいものを学ぶ一方で大切なものは過去から学ぶことである。例えば、浅野は1994年当時に次のように記している。

広がりはじめた大学授業の改善工夫の動向を見てみると、たとえば、学生に効率よく「知」を注ぎ込む工夫に重点をかける方向と、学生を研究＝学習主体として育て上げることを重点にする方向などがせめぎあっています。したがって、大学授業の改善をどの方向で展開していくか、ということが今後大きく問題になっていくと思います。とくに、大学の自己点検・評価のシステムを各大学がセットとしてきている近年の状況のなかで、授業改善をどのようにすすめるかについては、いずれ大学改革をめぐる中心的論点の一つになっていくと思うのです。（中略）

しかしながら、大学改革が「上すべり」になって、具体的な実践のレベルでの改善がなかなか進まない状況がまだまだ広く見られます。また、大学教育はかくあるべきだという議論は多いのですが、

それを具体的な実践にからんで展開することが弱い状況にあります。

この1994年の記述は20年経過した今の状況にも言えることであろう。大学教育の質的転換という指針はあるが、実際の授業の改革はどれほどすすんでいるであろうか。まずは授業を行うものが、アクティブ・ラーニングの理解につとめ、ひとつひとつ自らを変えていかなければならない。実質上アクティブ化した授業を実現するにはそれ相応の時間と労力を必要とするであろう。浅野(1994)が指摘するような「講義ノートにもとづいてただ語るのみという授業」をしている教員は今の時代にはいないであろう。けれども、パワーポイントやkeynoteにもとづいてただ語るのみという授業は意外に多いかもしれない。いつの時代も変わろうとするひとがおり、変わらないでおこうとするひとがいる。流行のアクティブ・ラーニング関係の資料だけではなく、そうした過去の変わろうとしたひとびと、例えば、和光大学授業研究会(1996)の授業研究や、浅野誠(1994)の取り組みからも学ぶことは大きい。

引用文献

- 浅野誠 (1994) 大学の授業を変える第16章 大月書店.
- Bonwell, C. C., & Eison, J. A. (1991). Active learning: Creating excitement in the classroom (ASHE-ERIC Higher Education Rep. No. 1). Washington, DC: The George Washington University, School of Education and Human Development.
- Braxton, J. M., Milem, J. F., and Sullivan, A. S. (2014). The Influence of Active Learning on the College Student Departure Process: Toward a Revision of Tinto's Theory. *The Journal of Higher Education*, 71(5), 569-590.
- 中央教育審議会 (2014). 新たな未来を築くための大学 教育の質的転換に向けて 生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申).
- 中村恵子・阿内春生・朝賀俊彦・松下行則 (2014). アクティブ・ラーニングに関するアメリカ視察調査について. 福島大学総合教育研究センター紀要. 17, 85-90.
- 田口真奈・松下佳代 コンセプトマップを使った深い学習ー哲学系入門科目での試みー 松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター (編著) ディープ・アクティブラーニング (pp.165-187) 勁草書房.
- 和光大学授業研究会 (1996) 語りあい見せあい大学授業 大月書店.

概要

アクティブ・ラーニングは伝統的な講義形式の授業にかわるものとして盛んに取り上げられている。アクティブ・ラーニングとは、学生が聞いている以上の活動を行い、そしてその活動について高次の認知的活動をしているような授業をいう。教員には学生が授業に積極的に参加するよう促し、聞く以上の活動をするなかで学生がその自身の行っている活動について考えるよう促すことが求められる。本研究では、アクティブ・ラーニング型授業の実現には次のような段階を経ながら進むとした。1. 一方向的な知識伝達型講義、2. 形式上アクティブ化された授業、3. 実質上アクティブ化された授業である。現在、多くの大学で授業のアクティブ化が進められているが、3の段階までの授業のアクティブ化にまではなかなか進んでいないのが現状であろう。本研究では、改革の進まない理由のひとつにアクティブ・ラーニングに対する理解の混乱を挙げ議論した。